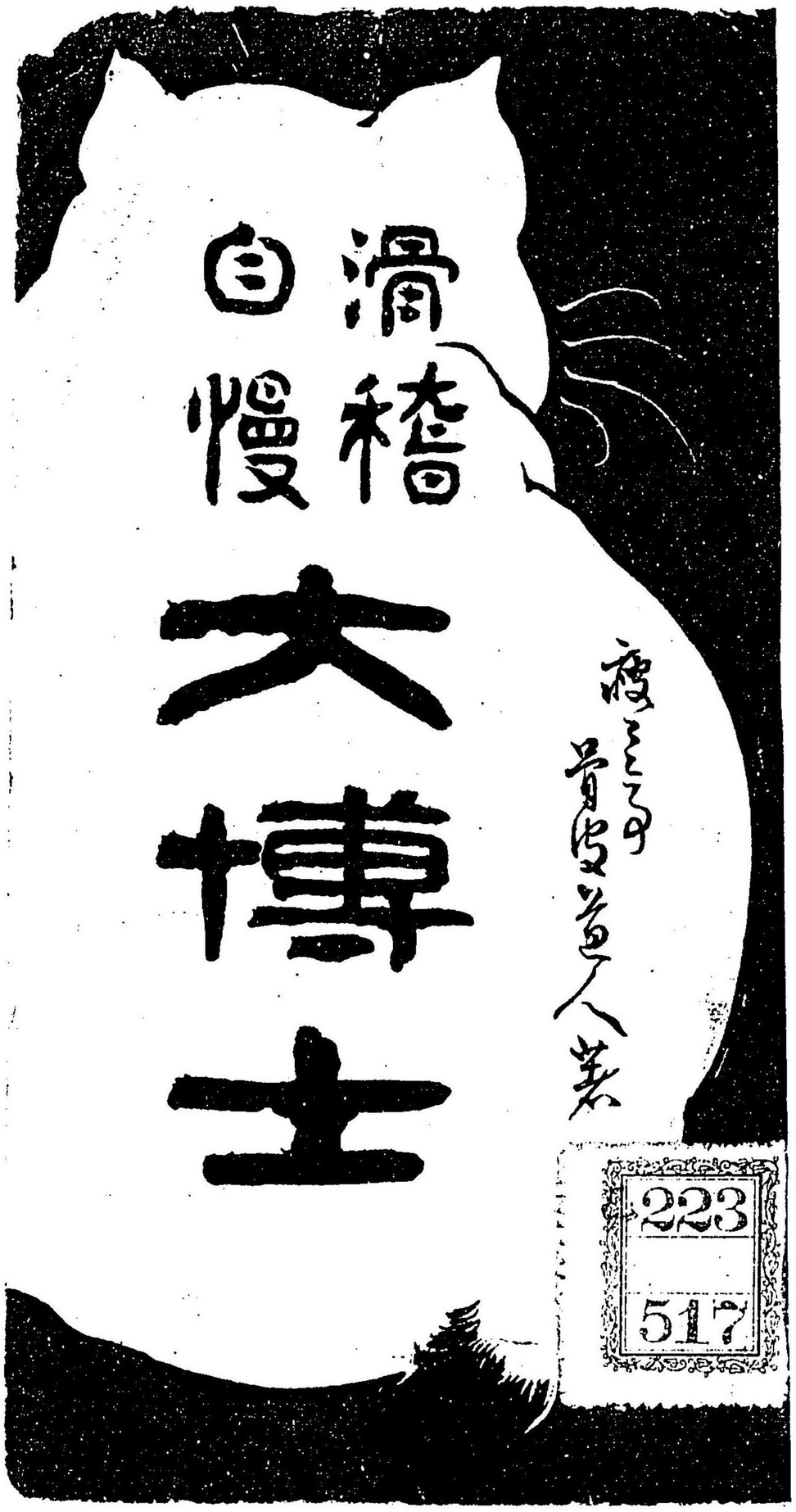

223
517

091674-000-4

特63-688

滑稽自慢大博士

瘦々亭　骨皮道人／著

M37

DBO-0135

特63
688

序

聞くが盛辛を嘗めたりと云ふ、道人これを聞けども、未だ其顔を見たる事なし、お龜が甘酒に醉拂ひたりも未だ其實を見たる事なし、云ふ人あらば、是れを聞けども、未だ其實を見たる事なし、若夫れ之を實際に見届けたりと云ふ人あらば、是れ立派な大法螺吹にして、即ち道人の話し相手とすべき足るの人なりとは云へ道人とても、法螺を好んで未だ立派な法螺を吹く得ず、只僅に知た振をして

明治
37 7 29
内交

和家
茅本

つぶ焼

生意氣を饒舌躁のみ、此書も亦其一なり讀人これを讀で益ありとせば讀むべし、讀で益なしとするも、亦格別御損毛はなき筈なり兎にも角にも法螺か生意氣か將た尤もか一寸御鑑定を願ふと云爾

明治卅七年七月

自分免許滑稽愕士
骨皮道人識

目次

○商法の講戯……七
○働きの説迷……一九
○身体を資本にせよ……三一
○飲酒の利害……四四
○証據物の効と無効……五六
○遊蕩家の大熱……六七
○色慾は戒むべし……八〇

○女房の効能……九八
○信用は立身の基……一一一

目次終

滑稽自慢大博士

○商法の講戯

西森骨皮道人著

智恵も東京日本橋の片隅にチヤクなッて相變らずの貧乏暮し、肝心な誤主人が骨と皮ばかりでヤツト虫の息と云ふ一件ですから之に附屬して居る周圍の障子などは勿論皮がなくて骨ばかり、これを算術家に見せて直踏をさせたら紙取て骨のこる二ッ進も三ッ進も動きも取ないと逃出し若し又母親に松下禪尼見たやうな人がありましたならば毎日

〳〵障子張て日を暮すで御座いませう、然が仕合せな事には米相場も六升臺をムグリ込でも世間の金融が惡くても其樣な事は平氣の平太夫ですナゼなら世間の景氣の宜とき丈からとて宵越の金が有でもなし米の相場が兩に二斗しても腹一杯食た事のない男ですから君子固より窮すを負惜を云譯でも何でもなゐが米相場は金融には些も頓着は致ませんイヤ其樣事はマア何でも宜として厄拂ひの假聲ぢやアなゐが貧乏神の事なれば三十日の關を打越て地獄の都の眞中へサラリーッと追拂ひ扨て此樣な變挺來な男の處へでも愚弄に來るのか胡麻を摺に來のかナニ胡麻を摺に來る氣遣ひはない先づ愚弄に來るのでは座いませうか隨

分一調子變ッた奴が遣て來ます之を落語家の筋書と云ふと「ぢ隱居さん今日は「イヨ誰かと思つたら佐助かマア上りなさい「ヘエ夫はぢ馳走樣て「何が沙馳走だ「夫でも今茶漬あがれと仰しやッたぢやアありませんか「ナニ茶漬あがれぢやないマア佐助あがれといッたのだイヤ例も氣散じな面白い男だ「此奴ア大しくぢり……夫ぢやアぢ隱居さん上りますせ……ヤットまかせのヨーイヤセー「仰山な坐りやうだト云ふのが初まりで夫から段々とトンチンカンの話しに移つて行のが紋切形ですが道人は素より寄席の高坐で稽古をした譯では有ませんから落語家のやうに旨くは饒舌れませんけれども兎に角一調子變つた奴

を種にしてお話を致ませう「一日の事ヒョコ〳〵と遣て來たのは猪尾助と云ふ瓢近者「先生今日は　骨「イヨ遣て來たナ　猪「遣て來んぢやない歩行て來んです　骨「二本の足でだらう極つて居らア一木足なら化物だ　猪「三本足なら五徳でせう　骨「さうサ四本足なら巨燵櫓よ　猪「さうノベッに遣れちやア敵はねへ　骨「先づ一本へコませて遣たナ愉快〳〵……時に何だね此節の景氣は　猪「イヤモウどうもはや夫は〳〵どうもはや言語同斷不埒の至りと云ふ位なもので景氣の好のが南京米と花骨牌ばかり　骨「夫やア世間の話しだらう世間の事は新聞で知れるから宜が自己の聞のはお前の景氣さ　猪「自己ですか自己の景氣だつて世間が惡けりやア矢張り宜かアありませんさね　骨「全体お前は何をして居るのだ　猪「何をして居るッてチャンとカウ胡坐を組て煙草を呑で居るぢやアありませんか　骨「今此處ではさうだけれども平生にさ　猪「平生にですか爾ですねへ平生にはと……別に何をして居るつて極つた事はありませんねへ時によりやア寢て居る事もあるし又た目が覺りやア起て坐つても居たり　高「夫ぢやア別に是と云ふ職分もなし又た商賣をして居ると云ふのでもないのかね　猪「左樣何にも仕ないで只ブラ〳〵と　骨「只ブラ〳〵とでは困つた者だが夫でどうして飯を食て行く　猪「どうしてつて矢張り人間並に左

の手に茶椀を持て右の手の箸で掻込のですへー七杯や八杯貪なア譯やアありません　骨「夫やア知れた事だが其飯に炊く米は何處にある

猪「桶の中にあります　骨「ハテね桶の中に　猪「他所の家ぢやア米櫃に這入て居りますけれど自己の家にやア米櫃がないから桶のなかへ打明けて置たり又たときとすると鍋の中へ入て置たり其實何處と極りやアないのです　骨「なるほど夫やア桶の中へ入て置ても鍋の中へ打明て置ても其樣な事は何でも宜が然して其米は何處から持て來る　猪「夫やア米屋から持て來まさアね　骨「米屋が親類でいもあるのかね

猪「ナーニ赤の他人で……　骨「赤の他人なら金を遣なけりやア米を

寄越まいが其金はどうする　猪「その金は借て置まさアね　骨「借て置たら取に來るだらう　猪「取に來りやア逃て居ります　骨「逃て居る處まで追駈て行たらどうする　猪「おつ駈て來りやア仕方がないから天窓をナグリ附て遣ます　骨「是やア乱暴だ其樣な馬鹿な事をしてブラ〳〵遊んで居るよりか何か商賣でも仕たら宜からう　猪「又初まつた其商賣をしろとか商法を仕ちやアどうだテーな最耳に鮹の入るほど聞飽ましたよお負に愚弄半分に商法はどうだ商法はどうだテーンだから困るぢやアありませんか此間も或心易い隱居さんの處へ話しに行たら矢張り商法を仕ろ〳〵つて勸めるから自己が何樣な商法を仕たら

宜でせうと聞と隱居さんの云ふにやア自己が極造作もねへ事で金の儲かる事を敎へて遣ふと云ふから此奴ア旨へ隱居さんは若へ時から商法に骨を折て夫が爲に今のやうな樂の身の上に成たんだから定めし旨へ儲け口の事を敎へて呉るだらうし又話しの樣子によつたら資本の少しも强請つけて遣ふと思つて一生懸命になつて聞て居ると隱居さんが期云ふのです先づ日本橋は東京の眞中となつて居るから其東京の眞中の日本橋近邊へ電氣燈の柱よりモット大きな長い柱をおッ立て其素鐵邊へ長アい木を四方八方へ出して其木をクルリ〳〵廻るやうに仕掛て置て其先へ大きな笊を一ッ宛しばり附て置んだと云ふのです　骨「ハテ

ね大きな風車だね　猪「夫がさ風車じやアねへから司笑い……マア是を何するのだと判斷します　骨「どうも分らないが夫を何するのだね　猪「分りますめへ此奴ア誰にも分りやう譯がない……其笊の中へイクラかヅヽ賃錢を取て人間を入るんだテーンです　骨「なるほど淺草の凌雲閣から思ひ附た仕事だナ……夫で矢張り何だらう望遠鏡でも貸てサア富士山に蟻が喧嘩をして居るのを能覽じろ筑波山に蜉蝣が晝寢をして居るのを能覽じろとカウ遣ふと云ふ趣向だらう　猪「どうして〳〵大違ひ夫はカヽ遣んだテーンです……その笊に淺草行だの四谷行だの神田行だの芝行だのと色々に極りを附て置て夫から神田

行の人は神田の印のある笹へ這入り四谷行の人は四谷の印のある笹へ這入ると云ふやうに失々その笹へ入て夫からクル〳〵ッと廻して淺草行なら淺草の眞中へ持て行て淺草降ッてんで其處へ打明る四谷行なら四谷の眞中へ持て行て四谷降ッてんで其處へ打明るやうにすると電車や人力車に乘よりか餘ぽど早くつて便利だがな人の遣ねへ中に早く此奴を遣て金儲けをしる初めの中やア珍らしいから屹度乘人が多いテーンですが人を馬鹿にして居るぢやアありませんかアハヽヽヽ　骨ナニ人を馬鹿にして居るぢやアない眞逆ソレ神田降ソレ新橋降と笹から人間を放り出す譯には行ないけれども併し當節は何でも烈しい世の

中だから先づその位に人の氣の附ない處にスバシッコク立廻ッて行なくちやア旨い金儲けは出來ないよ……此頃の人が能く蒸氣の後押と云ふ事を言ふが是は餘程の名言だと思ふよ……素より理屈から云やア蒸氣の後押が出乘やう譯はないけれども其處が譬へと云ふもので彼の早い蒸氣でも此進む世の中には遲いやうに思つて自分で降て後押をしたらモット早いだらうと考へた處は實に感心だ然から猪尾公も世の中に伴て最少し活潑く成らなくッちやア行ない　猪「へーさうですかねへ自己やア是でも隨分活潑い積りなんですが　骨「何が活潑いものか活潑い處ぢやない凡倉の親玉だ凡倉もズット功勞を經て轉繰返しに

なつた倉凡だ　猪「イヤに人を輕蔑ぢやアありませんが自己ヤア其癖誰と喧嘩をしても負た事アありませんせ　骨「ソレ夫だから困る喧嘩や摑み合をするなア活潑いのぢやない夫やア乱暴無敵放と云ッて人間のする業ぢやない犬や鷄のする業だ元來人間と云ふものは此世の中へ働らきに出て來たのだから只毎日ブラ〳〵とブラ附て居ては第一天道様に對して濟ない　猪「天道様に濟ないナンて大層古風に出掛るぢやアありませんか其様な事を云つた日にやア三ッ井の旦突も鴻の池の親方も尻をはしよつて溝浚ひをしたり荷擔ぎをしたり仕さうなものだけれど其様な譯に行もんぢやアありません　骨「また其様な解らない

事を云ふ夫だから困るヨ働らくと云ッたからとて只手足を動かしたり重荷を脊負たりするばかりが働らくのではない人の働らき方にも色々あるが先づ一喫遣てからユックリ話して聞さん　猪「自已も一喫遣てユックリと聞ませう

○働きの説迷

扨是から今云ひかけた働らくと云ふ事を話し仕やう……ソコでお前の云ふ處を聞と若し人間が此の世の中へ働らきに出て來たものなら三ッ井や鴻の池の旦那も尻をはしおッて働らきさうなものだが其様な事

は仕ないで毎日ブラ〳〵として遊んで居ると云ふやうに聞へたが三ッ井だとか鴻の池だとか云ふ大家の旦那になるほど精神の働らきと云ッて腹の中の働らきと云ッたら實に大變なものだ例へば君、君たらされば臣、臣たらず親、親たらざれば子、子たらずと云ッて一國の君たるべき人は一國の君たるべきやうに仕なければ其下に使はれる家來も矢張り家來たるべきの道を盡さず又た人の親たるべき人は親たるべきやうに仕なければ其子が親の云ふ事を聞ないと同し事で商人でも百姓でも職人の親方でも仕事師の首領でも人の目上に立て大勢の人を追廻して使をふと云ふにやア中々容易の働らきで出來るものではない夫に就

て斯云ふ話しがある　猪「何だか御説教でも聽に行たやうですねへ　骨「何だかぢやない是がお説教だ説教とは教へを説と書のだから是も矢張りお説教サ　猪「へー御説教が初まつたんですか……南無阿彌陀佛〳〵〳〵　骨「ナニ念佛は云はなくッても宜……ソコで昔し胃の腑と手と喧嘩をしたと云ふ話しがあるが一日の事手が胃の腑に向ッて云ふにはヤイ胃の腑の畜生め手前は年ケ年中そんな腹の中なんぞに蟄伏で居やアがつッて朝から晩までソレ飯だヤレ汁だ酒だ肴だと何につけ斯につけ自己ばかしを働らかせやアがる此畜生め手前も出て來てチト働らけへ馬鹿野郎がと云ふと胃の腑も負ん氣になつてオイ手公や手

前は外に居て自已の働らくのが見へねへから爾思ふのも無理ぢやアないが併し自已だからッて只遊んで居る譯ぢやアない毎日〳〵夜も晝も斯して手前から運んで呉る食物をセッセと消化て身体の肥料になるものは成やうに方々へ分配て遣し又た肥料を取た糟は尻の方へ廻すやうに骨を折て働らいて居るのだからマア其様な事を云はないで何か是まで通り御苦勞だけれども食物を運んで呉へと流石胃の腑だけに嚙こなして物柔かに云ッて聞せても手は中々承知せず何を吐露やアがる今まで自已も我慢をして働らいて遣たけれども何時まで働らいても際限のねへ事だから自已やアモウ今日限り働らかねへ夫とも手前も出て來

て自已と一所に働らくなら是まで通りに働らいて遣ふと云ふので胃の腑も一時は弱ッたか何にしろ自分で出て行て食物を取て來る譯にも行ないから其儘に抛棄て置と是まで日に幾度となく手の中へ廻ッて來る脂膏が些とも廻ッて來ない處から手は日に増し痩て仕舞て丸で骸骨のやうになつたので手も初めて氣が附き前に威張た様子は何處へやら行て仕舞て今度は手の方から胃の腑へ謝罪て行たと云ふ話しがあるがナント面白い話しではないか　猪一へー夫が面白い話しですかねへ自已やア何だか藪醫者が解剖の講釋をするやうで些とも面白かアありませんが併し夫から何したテーンです　骨一夫から何したと云ふ譯もない

けれども人間の世界も矢張り此通りで大家の旦那や上等の官員さんは一寸見ると樂な身体で何時でも遊んで居るやうに思はれるが今云ッた胃の腑と同し事で働らかない處か大變な働らきをして居るのだソコで是を早手廻しに云ッて見れば腹の中で働らいて居るのは目に見へない形ちの無いものだから之を無形の働らきと云ふ手足を動かして働らくのは形ちに顯はれて誰の目にでも見へるから之を有形の働らきとでも云はふか全体有形無形と云ふ言葉は斯様な處へ遣う言葉ではないけれども早く云ッて見りやア先づ其様なものだらうと思はれるテ　猪「ヘヽヱなるほど其様なものですかねへ　骨「了解たかい　猪「了解まし

たともね此位な事が了解なくッて此文明開化の東京に生て居られますものかアノ何でせう幽靈は形ちが無くッて手や足を働かすテーンでせう……其の位ゐなことア芝居で見ても知ッて居まさアね……然かねー先生彼の幽靈と云ふ奴つア皆んな手の出し方が極つて居るのは可笑いじやアありませんかズーット斯様な梅敷に手を伸して丸で藤八拳に負て壓氣に取れたやうな身振で迷ふた〳〵生替り死替り怨みを晴さで置べきかと云ふと片相手の野郎が膽を潰して其方何とかやら迷ふたナと云ひながら懷中から細小な卷物を出して幽的に見せ怨敵タイ散……　骨「何を云つて居るのだ狂人じみた……夫ぢやア矢

張り有形と無形がお前にやア了解ないのだ……何に致せお前のやうな其様な立派な豚見たやうた身体をしてノソ〳〵して居ないで何か一ツ商賣でも初めると云ふものか乃至また何か手に覺へた藝でもあるなら夫でも爲るとか何とか身体の治りをつけたら宜からう　猪「夫がね先生自己だッて何も斯様なに着た切り雀でお宿を尋ねてノソ〳〵として居たかアありません成らう事なら加藤清正糞でも喰やアへと云ふやうに眞黑な口髭でも生して　骨「イヤハヤ其澁紙面へ持て行て眞黑な髭を生された日にやア黑ン坊の化物株は上つたりやだ　猪「オット東西……夫から亞米利加仕立の洋服に佛蘭西から舶來して高帽子を被つて黑塗の馬車に樒妻と相乘で御者の屁を嗅ながら頰邊おッつけバアと遣とか商法筋の方で行やア　骨「商法筋へ丶ン……生意氣な……

……　猪「トザイ東ー西……紀の國屋文左衛門臀でも嚙ぶれと云ふやうに黄八丈の下着に糸織の上着と來て羽織は……さうさな何が宜ら
う先づ七子の黑に定紋付位として置て夫に仙臺平の袴を穿て　骨「茶番狂言でも仕やア仕まいし、猪「マア少し默止て聞て居て下さい　骨「夫とも葬式の施中と云ふ身振か知らん　猪「困るぢやアありませんか……夫から大きなカバンに拾圓札を一杯つめこんでサア金が欲いと云ふ者は何處に居る誰でも宜から金の欲い者は此處へ來いテーンで賣

出しの引札でも配るやうにバラ〳〵〳〵と紙幣を振時て遣度ンですが何にしろ二ッの拳骨を振廻して居た分にやア太丸越後屋の向ふを張度も張事が出來ず些とんべエ腕に覺へがあつたからつてパノラマの木戸番にも成れませんから據ころ無しに果報は寢て侍てと運の廻つて來るのを待て居りますのサ

骨詰らない事を當にして待たものぢやアないが全体果報は寢て待てと云ふのは阿房は寢て待と云ふのが間違ッたのださうだが成程それに違ひない世間の人が能く云ふ事に運は天に在り牡丹餅は棚に在りと云ふ事があるが是も成程それに違ひない運は天にあり牡丹餅は棚に在るものには違ひ無いけれどもイクラ天に運

の殘り物が澤山あつても只凡槍して立て居る者には天道樣が運を下さらない例へて見ればイクラ棚の上に黴の生るほど牡丹餅が澤山あつたッて棚の下へ行て只ワングリと口を開て居た分では棚の上から牡丹餅が落て來ないのと同じ事だソコでこの牡丹餅は何しても食事が出來ないかと云へばナニ造作もない一寸手を伸して取れば直にムシャ〳〵と食へる天の運だッて是と同し道理でセッセと稼ぎさへすれば運は自然に天から落て來る　猪「そんな旨へ譯に行もんですか夫ぢやア此世界中の人間が殘らず氣を揃へて稼いだら何しますお前も稼いだから運を遣ふお前も能く働らいたから運を遣ふと云つて無茶苦茶に運を天から

おッ落した日にやア仕舞には運の數が足なくなるぢやアありませんか

骨「馬鹿な事を云ふ運と云ふものは其様なに數の極つて居るものでは無いからイクラ運の受人が澤山あつても種の盡ると云ふ事はないものだ然が其様な事を心配するには及ばないからドシ〳〵稼いで運を貰う工夫をするが宜諺にも稼ぐに追附貧乏なしと云つてイクラ何様なに貧乏神が早足でも稼ぐ人には追附ないと云ふから何でも人間は稼がなくッちやア駄目だ殊にお前なんざア其様な立派な身体を持て居ながら資本も糞も入たものぢやアない其立派な身体が即ち資木だ　猪「オット此處が一番聞どころですね身体を資本にした者ア蜘男と大女ばかり

ですがナゼ自己の身体が資本になります　骨「又た了解ない事を云ふサウ何も角も了解なくちやア困るぢや無い……か仕方がない饒舌り序にモット能く了解やうに云つて聞せやるアヽ飛でも無い奴に取つかまつた　猪「何ですテー　骨「ナニ此方の事サ

○身体を資本にせよ

骨「マア能く考へて見るが宜　猪「何を考へるのです　骨「まだ是から云ふのだ　猪「さうでせう道理で聞へないと思つた　骨「常談ぢやないチト本氣になつて聞が宜　猪「ナニ氣分は慥です　骨「氣分が慥

ならソロ〳〵と饒舌り初めやうか全体商法にしろ何にしろ資本金が無ければ出來ない握り拳を振廻して居たからとて旨い金儲けは出來ないとは誰でも能く云ふ事だが成程これも一理ない事でもない時とすると此處で買て彼處へ持て行やア右から左に幾許〳〵儲かるがドウも金のないと云ふものは仕方のないもので見す〳〵人に儲けられる寶の山に入りながら手出しをする事が出來ないとは扨て〳〵悔しいものだと思ふやうな場合の事が無いでも無いけれども併し其様な事か毎日あるものでもなし好んば金を持て其處へ遭過した處が平生に遣つけ無いものが其様な處へ手出しをしてもサウ旨く計畫の通りに行やア宜がスポーンと向ふから外れて越中ふんどしと爲つた日にやア矢張り手出しを仕ない方が損をしないだけ儲けものだシテ見ると資金〳〵と云つても資金も用ゐやうに依ては何の役にも立ないで却つて資金があるが爲に失敗なつた例しはイクラもある早い話しが御維新後に彼の士族さんが公債証書を資金にして何でも是で商法にあり附かうと思つて金貸を初める者もあれば質屋になる者もあり或ひは米屋になつたり或ひは薪屋になつたり丁度赤穂の浪士が身を變じて敵きの隙を覗ふやうな有様でありたが其中で旨く遣おふせた者は千人の中で一人か二人その外の九百九十七八人迄は首尾よく失敗なつてスッテンテレックの血の涙サ……

……夫から資金があつても金儲けの手下な者を指て士族の商法士族の商法と云ふ悪口が初まつた位だがドウして士族さんの方では一生懸命だ親とも子とも頼んで居た公債証書は皆羽翼が生て何處かへ飛で行て仕舞たから　猪「へー不思議な事があるもんですねへ……へー公債証書に羽翼が生て飛びましたか……自己が其様な時に居たら竹の先へ鵜をつけてチユッと取て遣だッけ　骨「お前は兎角慾張た方にばかり話しを聞から困る公債証書に羽翼が生へたと云つても全く鳩や雀のやうに羽翼が生た譯ではない是は一寸譬へて云つたので……　猪「また譬へですか譬へなら譬へのやうに能く最初から斷つて置て下さい……

……夫から其譬への羽翼が何したんです　骨「やかましい聽人だ……夫から其公債証書も種なしに成て仕舞て二ッ進も三ッ進もアガキが附ないト云つて何にも仕ないで居た日にやア三度の飯も食ない處からモウ是までと思案を定めて人力車夫になる人もあれば米搗に雇はれる者もある位で一時は實に氣の毒な有様であつたが人間が一生懸命になつたと云ふものは怖いもので夫から全く自分の力で資金を拵へて出直した人は今では立派な身代になつて居るやうなもので同じ資本でも自分の腕から産出した資本なら役に立が他人から貰つたり借たりした資本はどうも役に立ない殊に商法と云へば大層らしいが商法も商法に

よりけりで外國人を相手にして生糸や製茶を賣買するのも商法なら家臺店の後押をしてお傳やオデーンと賣歩行のも商法又た足を資本にして人力車を曳のも商法なら指の先を資本にして人の肩を揉のも商法だから十分に資本のある人は物産會社を建やうとも外國人と取引を仕やうとも其處は其人の勝手次第だが資本のないお前見たやうな人間は指の先イヤ按摩にはチト不向だが足を資本にして人車を曳位な事は出來も仕やうし又た駈ずり廻るのが嫌なら日本橋あたりの橋の袂に坐つて居て蝶螺の壺燒ぐらゐな事は出來やうから先づ初まりは其樣な事でもして夫から段々と金の出來るに隨つて床店でも出して其次に世間並の

店をかまへて夫から追々店が繁昌するに伴て小增も置きお三どんも置くと云ふやうにして行ば仕舞には番頭と支配人が万事引受て遣て呉るやうになるから爾なればまたもので只眼玉をパチクリ〳〵して見張てさへ居れば夫で樂々と世渡りが出來るやうになるので是が即ち苦あれば樂ありだ夫を初まりから大面を搆へて樂をしようと思ふからソラ若しみの方がドシ〳〵と追掛て來てソレ米屋が來た戸棚へ隱れるヤレ薪屋が來た留主だと云へと云ふやうな世間のセマーイ人間になるのだ然からお前も資金が無けりやア身体の壯健なのを資本と思ツて人車を曳とも蝶螺の壺燒を遣かすとも又は下駄の齒入でも羅宇のすげ替でも何で

も宜から自分に出來る丈の事をするが宜　猪「人を馬鹿にしたイクラ何がなんだつて蟹を嚙だつて蝶螺の壺燒や羅宇のスゲかへが出來るものか　骨「ソレ夫だから行ない何だつて人のする業だもの仕て出來ないと云ふ事はない例へば……　猪「又例へばか……面白くもねへ骨「面白くなくッたッて例へば言て聞さなけりやアお前には了解ないからサ……マア默止て聞て居なさい……エヽト今何とか云はふと思ッたんだッけ……ムヽさう〳〵例へばお前に富士の山の素鉄邊へ一ッ飛に飛上ッて見ろ遠州灘を一跨に袴で見ろと云ッてもお前は天狗の仲間ではないから自已にやアそ其樣な事は出來ないと云ふだらう成ほど是は出來ないに違ひ無いお前ばかりぢや無い誰にも出來ない事だらう是が本當の出來ないのだソコで又た此處に櫻の花か梅の花か咲て居る　猪「何處に咲て居ります　骨「ナニ現在此處に咲て居る譯ではないが先づ何處かに咲て居るとした處で　猪「矢張り譬へですか　骨「さうサ譬へサ……其花の咲て居る枝をお前に一寸一枝折て呉ろと頼む者がある其時にお前が其樣な事ア自己にやア出來ないと云ッたら其頼んだ人は夫やア出來ないのぢやアない仕ないのだと云ふだらう是と同し事でお前の出來ないと云ふのは本當に出來ないのぢやアない仕ないのだ然から何事でも自分が是非遣て見やうと云ふ氣になりさへすれ

ば決して出來ない事はないものだ故に古人も陽氣發する處金石も亦透る精神一たび至らば何事か成らざらんと云はれた　猪「なるほど揚弓發する處金的も亦透るですね　骨「夫や何の事だね　猪「何の事だつて其位の事ア知つて居まさアね……彼の何でせう譬へと見ればと斯來るんでせう夫から矢場の阿魔子の處へ行て娘さん今晩はとか何とか云ふとオヤ入ッしやいお珍しい大層お見限りですねへと紋切形に來て夫から長煙管で一服遣て居ると彼婦的が親方お久し振でお手を拜見と來るから宜しいと云ひながら一本矢を取てパチンと遣とチーサな金的の的へカチンと當ッたから彼娘子がお見事ー　骨「何を云ッてるのだ

馬鹿〳〵しい陽氣發する處金石も亦た透ふると云ふのは其樣な馬鹿氣多ことじやアない陽氣とは人の身体を天地の時候に譬へたもので人間の若い時は丁と春の時候に木の芽草の芽の出る勢ひのあるのと同し事だから其勢ひを以て遣て行ば何樣な事でも出來ない事はないと云ふ戒めだ然からお前も彼は出來ないの是は嫌だのと云はないでチト本氣になつて稼がなけりやア行ない全体お前の年は幾年だ　猪「何だか小八ケ問敷巡査さんに取つかまッて說諭でも食やうな調子ですねへ……エヽト自己やア幾年だッけ二十六……ナニ二十六ぢやアねへ二十七か知ら夫とも二十五だッけか知ら……　骨「自分の歳も本當に知ら

ないたア隨分野ン氣な男だ　猪「ナニ去年の暮までは能く覺へて居たんですが去年の暮に友達同士が寄合て年忘れの酒を飲だもんですから夫からスッカリ忘れて仕舞ました……モウ年忘れナンてするもんぢやアありませんねへ今度は一番年覺への酒でも飲で見やうか知ら

骨「馬鹿な事を云ふ年忘れと云ふのは自分の歳を忘れる事ぢやアない早く云ッて見りやア今年のやうに格外に米が高かつたり或は惡い病が流行たり或ひは金廻りが惡くて商賣が不振であつたり其外自分の身の上に就て不仕合せの事があつたりした時に其暮になつてアヽ今年は惡ね年であつた此樣な惡ね年の事は早く忘れて仕舞てドウか宜年を迎へ

度と云ふ心持て先づお巨ひに機嫌克笑ッて酒の一杯も飲ので之を俗に年忘れの會と云ふので何も酒を飲で自分の歳を忘れて仕舞と云ふ譯ではなね殊に年覺への酒なんぞと云ふ事があるものぢやない　猪「さうですかねへ其奴ア大しくぢり一杯飲そこなつた　骨「ドウもお前は下司張て居て困るよ何とか艱とか難癖をつけて直に飲事を考へて居るが今の稼ぎ盛りに其樣な飲多苦連ぢやア困るぢやなね　か酒も時々少しづヽ飲のは氣散じで宜ものだけれど爾ノベッに酒ばかり飲で居ちやア大變身体に毒だ　猪「へー酒は身体に毒ですかねへ自己やア初めて聞た骨「ヤイ身体に毒ばかりぢや無ね元來酒と云ふものは色々惡ね事を誘

ひ出すものだ　猪「へー何云ふ譯でせう　骨「どう云ふ譯でせうと來られちやア又默止ても居られないがマア兎に角茶でも一杯呑でからの事に仕やう

○飲酒の利害

骨「全躰酒の出來た本家本元を正すと　猪「伊丹でせう　骨「ナニ伊丹ぢやなゐ　猪「池田ですか　骨「ナニ池田でもなゐ昔し毛唐人の國で儀狄と云ふ親父が何から何して思ひ附た物だか知らなゐけれども酒と云ふ妙痴奇客な物を製造はじめたのだが今となつて見ると飛でもなゐ

物を製造初めたものだ尤も儀狄の親父が造らなゐにした處が晩かし早かれ誰か知ら造り初めるには違ひなゐけれども兎に角酒があるが爲に何の位へ狂氣人間が出來るか知れない一寸その荒增を勘定して見ても先づ我利〳〵蒙者が掴み合を初めてお巡りさんの御厄介になるのも酒から起り裏店の宿六が山の神をナグリつけて摺盆摺木の大亂痴奇を働き隣近所にまで迷惑をかけるのも酒から起り打角遠くの國から學問の脩業に出て來た書生さんが酒に酔た勢ひで登樓をしてモウ一本持て來いモウ一本持て來いと贅澤を並べて翌朝になると河虎が臀を拔れたやうにボーンヤリとして附き馬で歸るのも酒から起り鼻の下のナガーイ

先生が安寝兒に鼻毛を算れて天浮羅ゴールの指環を胡魔化されるのも酒から起り身躰が段々と土左衛門のやうにブク〳〵脹れて鼻の頭が熟柿のやうになり其の揚句の果はヨイ〳〵となるのも酒から起り其外また先祖代々永く傳はッた大切の身代を棒に振て九尺二間の借家に引込のも酒から起り首も廻ない程に借金が出來て欠落をしたり夜逃をしたりして女房子の歎も酒から起りグデン〳〵に酔拂ッて溝泥の中へ轉がり落ち小便交りの泥水を飲で死去ことのあるのも酒から起ると云ッたやうな譯だから世の中に酒ほど人の氣を狂はして惡いものはない

猪「人を馬鹿にした其樣なに手前勝手の事ばかし云ッたつて仕方があ

りませんやイクラ先生が學者だか役者だか知らねへが其樣な事を云ッたつて其まア駄目の皮だ

骨「ナゼ〳〵

猪「ナゼだつて能くマア考へて見ろ此の世の中に酒が無かつた日にやア丸つ切り暗ですゼ

骨「そんな馬鹿な事があるものか

猪「あるものかッて屹度さうだから仕方がありませんや……先生のやうに云つた日にやア神樣でも佛樣でもドッコイしよ佛樣にやア酒は上ねへけれども神樣に御神酒を上ねへでも宜やうな理屈だけれど何の神樣だッて酒を飲ねへ神樣は無へちやアありませんか……夫御覽じろ神樣でせへ酒を飲から人間の飲のは當然でせう

骨「夫やア神樣へ酒を献るのは人間が勝手に献るので

何も神様が酒を飲せろ酒を飲せろと仰しやる譯でも何でもない然から神様へ献るのは早い話しが酢を献ても醤油をあげても神様は何とも仰しやらない　猪「人の事を乱暴だの無鐵砲だのと仰しやるが自己よりか先生の方が餘ぽど乱暴だ……先生今日はお前さん餘ぽど何かして居ますぜ戯談ぢやアねへチト寶丹でも嘗て氣を慥かに持なくッちやア行ませんぜ神様を三杯酢にでも仕やアしめへし神壇へ酢だの醤油なんぞを献る奴があるもンですか　骨「夫れやア献るものはないけれども物の道理がさ　猪「物の道理がてッたつて丸で道理が間違つて居るぢやアありませんか……自己やア議論だの理屈だのテー事ア知らねへ

が酒の事なら自己の方が能く知ッてるから講釋をして聞せやせう其處でヒヤ〳〵とか謹聽〳〵とか云つて感心をしてお聞なせへ……エヘン……と斯先づ他所行の咳拂ひをしてヲツト胡坐を組てぢやア有難味が薄いから痳痺を我慢してかう坐り直して　骨「オイまだ鼻が胡坐を組て居るよ　猪「東西……先生に對して其樣な惡口を利ものぢやアありませんやね……オホシ全躰一躰元來抑……酒チウものは憂へへの玉箒チウて何か腹の中に心配ぢやの苦勞の種ぢやのがあつた時にやア一寸五合引かけるとキヨロッと忘れるぢやア是が先づ第一酒の効能……然から「酒あれば何の手前か櫻の花」チウ歌もある　骨「夫

ぢやア丸で間違つて居る「酒なくば何の己れが櫻かな」と云ふのだらう　猪「さう〳〵「酒が無けりやア何處の已等が櫻かな」　骨「まだ違ツて居らア　猪「マア違ツて居ても宜や……夫からモウ一ッの歌が「酒を飲ば何ちの人でも心持が春になつて借金取が　鶯　になると……　骨「夫も違つて居る「酒のめば何處か心の春めきて借金取も　鶯　の聲」と云ふのだらう　猪「そんなに一々あげ足を取なくつても宜ぢやアありませんか　骨「何に上げ足を取と云ふ譯ぢあないが餘まりトンチンカンな事を云ふから敎て遣たのだ　猪「トンチンカンだッて餘計な浮世界でさア自已が講釋をして居んだから　骨「さうか夫ぢやア

モウ何にも云まいヨ……ム、成ほど借金取が　鶯　に化て夫からどうした　猪「夫から斯樣な都々一もある「好きナー酒エなアら飲ナーアぢやアーなイーがと來てトテチンシャンと來て、少コーシ扣アへに飲アーしやンせへエ……ヨウ〳〵感ん寸其處で一寸ぱ返杯……オット泡が立つ……泡が立なら此子を抱ナと……有がテー　骨「何が有がテーのだ狂氣染た　猪「然がね先生話しやア此位に仕なくッちやア味がありませんサ……夫からまだ斯云ふのもある「酒と女が若しなゐならば生て此世に用はなゐ」と夫からモウ一ッが「酒でも飲ッて浮き〳〵しやんせ氣から病が出るわゐな」と夫からモウ一ッが「お酒

たんと飲や心から可愛酔て管巻や猶ほ可愛」と夫からモウ一ッが「野暮を云はずにマア飲しやんせお神酒あがらぬ神はなゐ」と夫から端唄の文句にも「酒ぢや左ほどに思やせぬのに此方おもひ詰め」と夫から又た藝者の坐附にも「酒かず〳〵のオー目出たやチヤンおやかましう……

骨「オイ〳〵モウ宜加減にして止が宜よ隣り近所で何事が初まつたのかと思ッて膽を潰すから

猪「然つて云ふ丈のことを云は無きやア自已の氣が濟ねへものを

骨「夫れやッ云ふだけの事は何樣な事を云つても宜が狼が遠吠をするやうな聲を出して都々逸や酒落の端唄なんざア實に閉口だ

猪「自分の旗色が惡るくなつたものだから

此の美聲に難癖をつけて狼の遠吠なんぞと仰つしやるのでせうが鈴虫もガチヤ〳〵虫も無茶苦茶で差別がつかねへ樣な野暮な人に都々一を唄ッて聞したッて自已も張合がねへからお止に仕ませう……都々一はお止にした處で酒デハなかつた扨て酒の効能テーものア先づ此樣なもんですから先生もこの都々逸を能く覺へて居て誰でも酒の嫌へな奴が來たら猪尾助に敎授ッたが酒と云ふものア是〳〵の効能があつて誠に結構なもんだから女房を質に置ても酒は飲が宜と云ッて意見してお遣なせへ……イヨ感ん寸旨へものだ

骨「何が感寸で旨へのだ其樣な浮々とした了簡だから何時までも身が持なゐのだ併しお前の云ふ

處も一理なゐ事もなゐ……万更一滿の酒も飲なゐと云ふのも餘まり興が無さ過るから少しヅヽ飲のは宜が正覺坊を供につれて猩々に提燈を持せるやうでも仕方がなゐ……然からお前が今云ッた都々一の中に好な酒なら飲なぢやなゐが少しひかへて飲しやんせと云ふのが有たが爾云ふ風に遣ば先々宜のだ　猪「ハテナ自已が其樣な都々一を云ッたか知ら　骨「空ットボケちや行なゐ然も破鍋を叩くやうな聲を出して唄ッたぢやなゐか　猪「ヘーさうでしたかねへ夫にやア何か証據がありますか　骨「何も別に証據はなゐけれども現在お前が今此處で唄ッたに違ひなゐ　猪「証據のなゐものを慥に唄ッたとは云へますまゐ

骨「イヤに捻繰て來るぢやアなゐか是ンばかりの事に証據だの何だのと小八ケ間しゐことを云はなくッても現在唄ッたに違ひなゐのだものや猪「然ッて裁判所へ出ても證據がなくつちやア云ひ條が通ふらないぢやアありませんか　骨「夫やア裁判所は裁判所お互ひの交際は交際だから平生かうして交際て話しをして居る中で証據だの何だのと其樣な小理屈を云ふものでは無イ全たく自分の口から唄ッたものなら別に証據がなくても唄ッたと云ふものだ　猪「さうですかねへ自已やア又た証據が無けりやア裁判所へ擔ぎ出されても勝るテーから唄つた謠でも唄はねへ借た米でも借ねへ飲だんでも飲ねへ食た魚でも食ねへてッて

も夫で宜もんだと思つて居た　曾「其様な馬鹿な事があるものか尤も
お前ばかりぢやアない近頃の人間は大層薄情になつて犬が屁を放ても
ソレ裁判所だ猫が小便を垂てもソレ法律だと云ふやうな事が流行だが
是は誠に宜く無い事だ

○証據物の効と無効

以前徳川政府の時代はに政治の執方が素敵に嚴敷ッて中には杓子定規
の事もあつたが其頃は裁判所と云つても奉行所と云ふものが只一ヶ所
あつたばかりで今のやうに治安裁判所だの始審裁判所だの控訴院だの

大審院だのと云ふものもなし又た法律と云ふものも何か知ら箇條書の
者があつたには違ひなゐけれども夫を知ッて居る者は只奉行所のお役
人ばかりで今のやうに民法だの刑事設訟法だのと云者も無つたから人
民は只無暗に奉行所を怖がつて虚言を吐ても人を欺しても殺される事
と思つて居から人間が誠に正直で宜つた……尤も其頃だと云つても
隨分泥坊もあり巷賊もあり放火もあり親殺しもあつたけれども先づお
しなべて云へば正直で義理堅ゐ方であつた……然から人の能く云ふ
話しに金を借たとき其証文の文句に一ッ金何兩也右の金子借用致し候
處實正なり然る上は氷る何月何日限り相違なく返濟致すべく若し其斯

に至り返金致さず候節は人中にて汚笑ひ下さる可く候と書たと云ふ話しだが成程ズット大昔しには人に笑はれるのを大變な恥のやうに思つて居たかも知れない夫が段々と世が開けるに伴て人間が鐵面皮なつて今では笑はれる位な事は河虎の屁で　猪「オツトお話しの中ですが其の河虎の屁と云ふなア何の事です　骨「河虎の屁と云ふのは本當は木葉の火と云ふのだけれども木葉の火と云つた分ぢやアお前達の我利〳〵蒙者には分らないから矢張り了解り易ひやうに河葉の屁と云つたのだ　猪「寄席か何かへ行て聞て來ましたね　骨「ナニ落說家なんぞに聞ものか此位の事アまだ母親の腹の中に居る時分から知つて居たの

だ　猪「旨く云つてるぜ……此奴も証據のねへ事だから夫ぢやアマアさうして置て夫から其の河虎の屁が何したんです　骨「何だ旨く云つてるぜたア失敬千万な……今ぢやア笑はれる位な事ア河虎の屁で甚だしい奴になると只だ一圓か二圓の端た錢を借るのでも三人連借の名義で夫印紙を張て其証書面には斯限に返さなければ首を取れても宜様な事を書て置乍ら期限が來ても平氣の平左でスマーシ込で居から貸た方で嚴く催促をすると何時行ても留主又た偶に出會して話しをすると言譯は扨置て却つて逆捻を食はせるソコで貸主は怒つて裁判所へ擔ぎ出す裁判所から呼出狀を出すスルト幾度呼出狀が來ても皆な握り殺し

て仕舞て一度も出ない其中にまた惡智惠を附る奴があつて逃亡届けを出す逃亡をして見ると裁判所でも仕方がないから欠席裁判にする爾すると借た方の男は〆子の兎々で何處かへ轉居して影も形も無くなつて仕舞う其の後どうかして取捕まへると其の身上は遠くの昔し嗅アの名前になつて居て本人はスマーシ込で身ぐるみ身代を出す其品物を調査て見ると三年醬油で煮〆たやうな古犢鼻褌が一本に底のぬけた破れ足袋が一足ぐらいなもので百兩の抵當に編笠一蓋よりかモソトひどい……併し昔しでも金を返すのは嫌だッたと見へて借る時の地藏顔に濟す時の閻魔顔と云ふ諺があるが閻魔顔をしても宜から返すのは未だ

正直なので今では閻魔顔にも外道顔にもテンキリ返さないのだから酷いぢや無いか尤も此樣な奴は最初から返さない積りだから元手の入らない印形ならイクラでもベタ〳〵捺し又た貸主の方でも若し返さ無いと困ると思ふから三人連借の証書を取て利息と云つだら目の玉の飛出すほど高い五兩一分で月に二度の切り替へお負に利子と手數料と筆墨料と印紙代を先取に引て仕舞と肝心な元金は空になつて仕舞位だがイクラ手堅い証書を取て置ても何樣な確乎な証據を持て居ても今云つたやうなズルイ奴に出會た日にやア何の役にも立ない……然から証據〳〵と云つても証據と云ふものは先方の人間次第なもので先方の人間

が正直なら証據がなくても借たものはチャン〳〵と返すし先方の人間がズルイ奴だとイクラ確乎な證據を取て置ても其證據の通りには決して行ないシテ見ると證據と云ふものは有ても無くても宜くらいなものだ　猪「アハヽヽヽ然からば今日は餘ぱど何かしてると云ふのですヨ……常談ぢやねへアお氣を慥に願ひますぜ……證文もなし印形も捺ねへで金を貸奴が何處にあるものですか其樣な金貸がありやア自己なんざア毎日〳〵行てソレ五圓だソレ十圓だッてノベッに借に行まさア　畳「毎日借に行たつてお前のやうなズルイ奴にやア先方で貸ないから慥だ……尤も是非證據として書て置なければ成らないものは死

去ときの遺言……是は是非なければならんナぜならば我々共のやうなスッテンテレックの者はどうでも宜が中等以上の身代を持て居る家の主人が默止て死で仕舞と其跡に殘つた息子達が各自に慾張根性を出して兄は兄で丸取をしやうと思ひ弟は弟で横取を仕やうと思ひ又ヒョット親類中に惡い漢でもあると此奴も色々な惡謀計をして横合から取にかゝると云ふやうになると折角先祖から代々骨を折て拵へた身代も夫が爲に滅茶〳〵になつて誰も彼も皆虻蜂取ずに成るやうな事は世間にイクラも例しのある事だから能く其樣な事のないやうに先づ慥な親族の者を證人に立て夫から相續は兄にさせるとか又は兄に家名を續せ

べきだけれども兄は甚六だから弟に相續させるとか又は男の子のない人は是々斯云ふ者を娘の聟にして何うするとか或ひは甲家乙家に何程〳〵貸金があつて甲家乙家から何程〳〵借て居るから是を斯して彼をアヽして總領の取分が何程〳〵で二男三男には何程〳〵ヅヽ分て遣る夫から妾を斯云ふ處分にしてお三どんを孕ましたのは何すると云ふやうに何から何まで委しく書て置ば其書た物が口を利から當人が死た跡でも決して酢だの蒟蒻だのと云ふ悶着が出來ない尤も是は死際には限らない元來人間と云ふ者は老少不定で年を取たから死ぬ未だ若いから死ないと云ふ譯でもなしイクラ若くツても無常の風に吹れりやア赤

ン坊の中に死者もあれば又イクラ老を取て梅干の化物見たやうな面附に成てもピンシャンとして居る者もあるシト云つて昨日までピンシャンして打殺しても中々死さうもない人間が今日になつてポックリと、お陀佛になるものもあるから爾ならない前平生に能く氣をつけてチャンと跡の處分法を書て置方が宜殊に當節の人間は義理も人情もなんにもない兄弟は他人の初まり處が間が宜かつたら親父の天窓でも張倒して懐中の金を持て行兼ない時節だから猶更氣をつけた方がよろしい先づ證據で役に立のは是れだけのことで其の外のことは待に立ないことがポツ〳〵と澤山印形を捺したりペタ〳〵と無暗に印紙を張たり又た其

の文句の理屈張たほどの効能はないやうに思はれる……オイ……ヤイ……猪尾公……どうした　猪「アヽ宜心持でツイ引取れた　骨「引取れるなら遺言を書て遺ふか　猪「ヘンぢ氣の毒さま遺言はモウ今朝歸り掛にチャーンと仕て來たんですから　骨「今朝誰に……猪「彼奴にサ　骨「彼奴とは……　猪「阿魔ッ猪でさアね　骨「阿魔ッ猪とは……　猪「此奴ア困つた……彼婦にサ　骨「彼婦とは……

……　猪「アレまだ分らない彼の花魁にサ　骨「何處の花魁に　猪「何處ッて花魁てやア大概芳原に極つて居まさア　骨「芳原の花魁をどうして又たお前が知ッてるのだ　猪「どうしてつて買たから知つて居まさアね　骨「ヘー其面でか　猪「其面でかつて面で花魁を買アしめへし　骨「ナニ面で女郎を買う譯ぢやアない素より女郎は客を取のが商賣だからナリン坊でもカッタイ坊でも怪面でも般若でも何でも搆はない誰が行ても客にはするけれども全体女房や子供のある親父ッ面をした者の行べき處ではない況てお前なんざア錢もありもせん癖に生意氣な……　猪「ヘー是やア面白い此奴ア一番聞處だ　骨「聞處なら聞が宜何でも答辨するから……だガ一寸一服やる中待てもらひ度

○遊蕩家の大熱

猪「一寸一服だッてもう八服ものみましたせモウ徐々聞初めても宜でせう　骨「宜しゐ阿古屋の臺詞ぢや無ゐけれどもマなんなりと云はふわいなア　猪「此奴ア面白い爾出られりア此方からも一番芝居がゝりで行やせう……エ今何とか仰しやいましたッけねへ……たしか女房や子供のある者ア女郎買に行ちやア成らねへと仰しやッたやうに思ひましたが爾云ッた日にやア鈴木主水は何したもんです淨瑠璃と云ふ本の中にも鈴本主水と云ふ武士は女房もちにて子供が二人サ宜がすかね夫で白糸と云ふ女郎に夢中になつて通ッたぢやアありませんか夫から又た大星由良の助を御覽じろお石と云ふ女房もあり力彌と云ふ立

派な息子もある身でお輕に惚け込み……由良さん此方手の鳴る方へと鬼ゴッコなんぞをして遊んだぢやアありませんか　骨「夫やッ芝居でする事だから屹度そんな事があつたものやら全たく種のない事を作者が彼樣な事に作つたものやら其邊は何だか本當に分らないけれども先づあつた事としても鈴木主水は我家に傳はる名刀が紛失したので夫を穿索の爲に白糸を買たのだし又た大星由良の助は敵きに由斷をさせて討取らうと云ふ計略でお輕に現をぬかして居るやうな眞似をしたのだからお前達が無け無しの財布を拂ひて鼻の下を長くするのたア丸で事が違ッて居る　猪「なるほど夫やアさうかも知れないけれども併し

色は思案の外でさアねマア芳原へ一晩往つては覽じろ女房子があつて往つてる者ア自己ばかりぢやアねへ隨分四十五十面を下げて遊んで居るものも澤山にありまさア　骨「夫れやア隨分澤山にあるだらうけれども其奴等は皆な野呂間の奴だ……宜年をして馬鹿〳〵しい順當なら自分の息子や若い者に能く異見をして横路へ這入込まないやうに氣を附なけりやアならない役目を持て居ながら人の事處か自分が先棒になつてノラクラして居るやうじやア實に困るぢや無いか殊に女郎と云ふものは昔しの謠にも女郎の誠と鷄卵の四角あれば三十日に月が出ると云ふ通り女郎の云ふ事を本當にしてセッセと通ッて行ほど馬鹿げた

間抜じみた事はない　猪「其奴ア誰でも能く云ふ文句ですヨ……誰でもさうは云ふけれども夫やア女郎の味を知らない偏屈人の云ふ事です……然が自己やア昔しの事ア何だか知らないから女郎に誠が無かつたかも知れませんけれども今ぢやアお月樣も開化して三十日にでも朔日にでもノコ〳〵サイ〳〵と出て入らつしやるから女郎だッて矢張開北して誠がありまさアね　骨「イヤ決してさうで無い月と云ふものはチャーンと出る時と這入とときと極つて居るものだから只暦の拵へやう一ツで三十日に圓くなるやうに仕やうとも十日に圓くなるやうに仕やうとも夫は自由自在に何でもなるけれども女郎の心ばかりは暦をド

ウ改正したからつて規則を何様なに立たからッて爾注文通りには決して行ないから開化すれば開化するほど虚言の吐やうも上手になるかは知らないがお月様が三十日に出るから女郎も虚言を吐のを止たと云ふ道理は果してない　猪「草履でないか徒跣でないか知らないけれども自己なんぞの女は誠があるから可笑い　骨「自己なんぞの女つてお前の物と極ッて居る女があるのかね　猪「何も極ッて居る譯ぢやアありませんけれども自己が買てるから自己の女でさア　骨「自己が買て居る……なるほど夫ぢやア何だねお前が買切にして置く女の事だね

猪「アレまだ分らない……爾ぢやあないですよ何も自己が買切にして置女と云ふ譯もないけれども自己が時々買に行く相方の女ですョ

骨「夫ぢやア早くさう云ふが宜ぢやないか自己の女だの自己が買て居る女だのと御大層らしい熱を吹ないで　猪「何も御大層らしい熱を吹譯ぢやアありませんけれども誰でも自分の相方の事を自己の女だの自己の買て居る女だのと云ふぢやアありませんか　骨「夫やア云ふ奴が間違ッてゐるのだ　猪「夫ぢやあ何と云ッて宜のです　骨「何と云ッて宜ッて今お前が云ッたやうに時々買に行く相方の女と云へば宜のサ

猪「大層八ヶ間敷のですねへ……夫ぢやア自己が時々買に行く相方の女なんざア本當に實がありますぜ其様な事を云ふと自己が時々買に

行く相方の女を譽るやうだけれども本當に自己が時々買に行く相方の女と云ッたら人が時々買に行く相方の女なんぞたァ夫こそ雪と炭ほどの大違ひです昨夜なんぞも自己がトン〳〵トンと二階へ登ると……イヤどうも心から惚テーると云ふものァ實に怖いもんですねへ自己がトン〳〵〳〵と階子段をあがる其足音で彼婦めはチャーンと自己が來た事を知ッてますぜ　骨「夫やァ知れる筈よお前は跛脚だもの　猪「其樣な惡口を云ふなァマァ止に仕て下さいよ……夫から自己がまだ上るか上らなゐ中にモウ彼奴はバタ〳〵〳〵と飛で來てアラ吃度お前はんだらうと思ッて出て來たらお前はんだよ本當に嬉しいねへ……

……今日お前はんが今夜には吃度行と云ッて端書を寄越たから吃度來るに違ひなゐたァ思ッて居たけれど餘まり遲いからどふしたのかと思ッて何樣なに案じたか知れやァしない　骨「何だ女郎買に行のに先ぶれの端書を出して置く……是やァ驚いた　猪「東西〳〵夫から餘まり遲ゐから若し何か急な用でも出來て來られなゐのか知らと思ッて先刻辻占を買て見たら「きつとくる」よと出たんだよ本當にお前はんは罪造りの人だョーてんでキューと首ッ玉へかぢり附て頰邊へ食ひ付やァがつてね先生……　骨「オイ常談ぢやあないそれ涎が膝まで流れるぢやなゐか見ッともねへ　猪「涎ですか涎は斯拭ば取て仕舞まさァ夫

からね先生昨夜はとう〳〵一晩中自已を寢かさねへんですよ夫からまだ自已の驚いたなア……實ア昨夜は少し手薄で行たもんですから今朝勘定となると五錢ばかし足りないからハテ是は困つた事が出來た何したら宜からうと思ッて心配してると彼婦的はチャンと見て取てお前はんは何を其樣なに鬱心でるのだねへお前はんの心配は妾の心配も同じ事だから何だか妾にも云ッてお聞せなと云ふから實ア是々だと云ふと其樣な事を心配お仕でないョ其位なお錢なら妾が出して置から宜やねお前はんは本當に正直な人だねへとニヤリッと笑やアがッてねへ先生ぞふでせふ十錢の錢貨を一ッ放り出して呉たんです……五錢足り

ねへ處へ十錢殖たから勘定をして仕舞でも五錢殘ッたんですが此の殘ッた五錢を自已がぞふしたと思ひます　骨夫やアぞふしたか分らない　猪分りますめへ是やア分りやふ筈がない……夫から其五錢を自已が袂へ入れやふとすると彼婦の云ひやふが宜ぢやアありませんか……アノ夫ンばかりの餘錢を持て行と人が客嗇坊だの赤螺だのと云ッてお前はんの顏に係るから仲ぞんが來たら餘錢やア入らねへお前に遣ッて偶にやア仲ぞんも喜ばしてお遣なさいよテーからム丶成ほど夫もさうだ十錢貰はねへ曉だと諦らめりやア客くもねへ錢だと思ッたから彼婦の云ふ通りにすると仲ぞんが喜んだの喜ばねへのッて米搗バッ

夕が年始に來たやうにヒヨコ〳〵お辭儀ばかし仕やアがッて其癖平生に祿玉に口も利ねへ野郎が急にお世辭を云ふたア實に金の威光てものアひどいもんですねへ……ナント恐れ入つたもんぢやアありませんか……どうでげす先生自已が時々買に行く相方なんぞてものア先づ爾云ふ氣立です第一實があつて氣前が宜ッて夫で嫖緻がよくッて貞女と來テーるから本當に堪へられ〳〵ねへぢやアありませんか……どうです先生是でも女郎に誠がありませんか……エヽ先生グウの音も出ねへでせう夫れば覽じろ然から自已やア今に山の神を叩き出して彼婦を連て來る積りでさア　骨「なるほどお前は宜了簡だマア裏の井戸

邊へ行て天窓から十五六杯水でも浴て來るが宜さう仕なけりやア迚も話しにやアならない　猪「ナーんとか云ッて旨く逃やうと思つて　骨「ナニどうせ今日は隙ッ潰しだから逃は仕ないが迚もお前のやうに爾逆上て居る處へ云ッて聞せたからつて馬の耳に念佛で了解まいと思ッてサ　猪「ナーニ了解ますともね大了解の懇々痴奇だ……サア英語でも漢語でも大和詞でも田舎詞でも何でも云ッて傍覽じろ自慢ぢやアねへが了解ねへ處ア跳除け了解處だけやアチャーンと呑込で見せますから　骨「夫ぢやア云ッて聞せるからマア耳の糞でもホヂクルが宜

○色慾は戒むべし

骨「お前の云ふ事は何だか滅茶苦茶でサッパリ譯が了解ないけれども マア一寸聞て見ると女郎の處へ端書を遣たら先方で喜んで待て居た夫から勘定が五錢足なくッて心配して居たら女郎が十錢出して呉た然だから誠がある氣前が宜お負に嫖緻がよくつて貞女だと云ッたやうに聞へたがイヤハヤ何の事やらサッパリ譯が了解ないぢやないか……全体女郎買に行のに葉書で知らせて遣るなどゝ其様な大ベラボウが何處の天竺にあるものか然して又た女郎が五錢か十錢の端た錢を呉たッて

夫で氣前が宜もないものだ馬鹿〳〵しい五錢や十錢の端た錢は大道の乞食か阿房多羅坊主に投て遣る錢だ然から本當云やア人を輕蔑た失敬千万の奴ッ自己を大道の乞食か阿房多羅坊主かなんぞの様に思ッて居るかと一番江戸ッ子肌で吐嗚つけなけりやアならない處だ夫をタッタ五錢か十錢放り出して呉たのを有難さうに戴いて氣前が宜の何のと譽て居るたア何たる腰抜野郎だらう實に呆れが返ッて阿房が禮に來るやうな始末ぢやアないかお負に貞女……どうも早や餘り馬鹿氣て居て拶挨の仕やふに困るぢやないか……全体貞女と云ふのは何の事だか知つて居るか知らないけれども貞女と云ふのは貞女兩夫に見へずと云

つて自分の持た亭主が死んで仕舞か乃至また何かの仔細があつて離縁になつても再び亭主を持ないで一生涯後家で暮すと云ふやうなのが全たくの貞女と云ふものだ……然から女郎が若し貞女でお前のやふな素寒貧野郎を只た一人お客にして居た日にやア女郎は皆な鼻の下が乾上ツて日干になつて仕舞はあ……然が其處が商賣でお前のやうな素塞貧の一文なしでも又た目欠鼻ッ欠の醜男でも惚たとか脹たとか云つて旨く調子を合せなけりやア娼賣が上つたりやに成るから其處で仕方なしに惚た様子もして見たり夫婦に成らうと云つても見たりするのを夫をお前のやうに無暗に鼻の下をデレスケにして彼婦の情夫は自己一

人だ彼婦は本當に實があるとか誠があるとか思ッてウカ〳〵はまり込むなア餘ぞ野呂的の奴だ……尤もこの野呂的はお前ばかりではない女郎の手練手管に乗て大熱〳〵の人は皆な野呂的だイヤ野呂的が女郎買に行く譯ではない平生は利口だの才子だのと云はれる人でも女郎の手管に掛るとツイ野呂的になつて仕舞のだ……然から女郎と云ふものは實に恐怖ものので古人の句にも『蛇食ふと聞けば恐ろし雉子の聲』と云ふ事があるが成ほど雉子の彼の奇麗な姿を見ると實に惚々するやうな羽色で居ながら彼で蛇を好んで食ふと聞て見ると其鳴聲を聞ても怖いやうなもので女郎も彼様な奇麗な優しい虫も殺さないやうな顔付

をして居ながら彼で虎のやふな立派な男をグニャ〳〵とさせて身代を棒に振せて仕舞かと思ふと實に恐怖ものだ　猪「默止て聞てると何だか獨りで理屈張た多話言を吐てるぢやアありませんか……アヽ了解た昨夜空床を脊負せられて來た其の腹慰ですね　骨「まだ其樣な事を云つて居るのかい夫ぢやア今度は最少し了解り易いやうに昔し話しを仕て聞せやう　猪「ナニ昔し話しですッて……人を馬鹿にして居るぢやアありませんか四ッや五ッの餓鬼ぢやアあるめへし　骨「ナゼヽ　猪「ナゼたッて黨だッて彼の何んでせう……爺さんは山へ芝苅に婆アさんは川へ洗濯にッて彼でせう　骨「なにを云ふのだ其樣な降

らない事を云ふものか　猪「へーさふですか降らねへことで無けりやア聞て見ませう　骨「エヘン斯云ふ話しなんだ　猪「へーエなるほど夫から……　骨「マア默止て聽て居るが宜ぢやないか　猪「默止てるとツイ眠くなりますからねへ……マア自己に搆はねへでヅン〳〵と遣て下さい　骨「夫ぢやア初めやふか……昔し或る金持の家の息子どのが女郎買に行て夜更に歸るとき旅は路伴れ世は情け何でも賑やかなのが宜しい若旦那は淋しいのがお嫌ひだから大勢でお見送りを仕やうと云ふので相方の女郎は勿論幇間から茶屋の女から大勢で取り卷て常談を云ひながらワヤ〳〵〳〵と騷ぎながら歸つて來ると此方

の松蔭から黒装束を着て黒頭巾を被つた大の男が凡そ五六尺もあらうかと思ふほどの大刀を抜てヌッと何とも云はずに出て來て彼の息子の襟首を鷲掴みに掴んで矢庭に其處へ捻伏た　猪「イヤア驚きやがつたらうなア　骨「スルと今まで死なば諸とも三途の川を手に手を引てと云つて居た女郎も……宜かい女郎もだよ夫から又た生命を捨ても旦那の恩は忘れませんと云つて居た幇間も皆な膽を潰して一目散に逃て仕舞た其後に聞て見たら女郎も幇間も七日七晩と云ふものは丸で目を廻して生体がないから定めしお陀佛に成たのだらうと思つて棺桶へ入れて仕舞と流石に娼賣人だけあつて棺桶の中から香奠を取りに出

て來たさふだ　猪「眞面目になつて聞て居りやア人を馬鹿にした落し話しですか　骨「ナニ夫は串談だが其泥坊は息子を引起して云ふにはヤイ此の野郎も此夜更に女郎や幇間なんぞを大勢つれて歸つたのは何の爲だ有体にヤせ若し虚言を吐とこの大刀で横ッ腹へ墜道を開るからさふ思へト振ば玉散る氷の刀と云ふやうな奴を獅子ッ鼻の先へズットッ猪「一寸待て居さいよ……ナゼ其息子の鼻が獅子ッ鼻だと云ふ事が知れました　骨「ムヽ此奴ア自己が惡かッたッたお前の鼻を見て居たものだからアハヽヽヽヽ　猪「常談ぢやアありませんせ　骨「鼻の先へズット刀を突出されたから息子は眞蒼になつてブル〳〵震へながら

ハイ私しが大勢の者を伴て歸りましたのは貴方のやふなお方に出られては怖いと思つて用心のために伴て參りましたのでゐ座いますと云ふと泥坊の云ふには用心の爲は分つたが又た何のために自己のやふな者を恐れるのだと聞と息子の云ふにはハイ貴方のやふな人を恐れますのは第一にはヒョッと身体に怪我でも仕てはならぬと思ひ又た二つには金や衣服を剝取られてはならんと思ひ又た三ッには若し其樣な事があつては世間へ對して外聞が惡いと思ふからで汚座いますと云ふと泥坊は大口を聞てアハヽヽヽと笑ひイヤハヤ手前は餘やど大馬鹿の三太郎だ成るほど其樣な大馬鹿の三太郎で無けりやア女郎や幇間の食物に

はなるまい……イヤ面を下げて已れの顏を見ないやふにしてヨーク聞けよ……猪尾公もヨーク聞けよ　猪「能く聞イてるぢやアありませんか夫ッから何ッてッたんだす　骨「夫ッから泥的の云ふには手前らが自己のやふなものをおそれるのは第一身体に怪我でもすると行ないと思ふとは何の多話言だなにお茶ン茶羅可笑へッてお臍が茶を沸すぢやアないか尤も手前に限らず世の中の人は些とん許しの怪我や過失を知ッて其の大きな怪我や過失を知らないものが多いナゼなれは身に怪我をする事や泥坊よりも酒色ほど恐ろしいものはないぢや無いか酒色によつて怪我をし身を失ひ家を亡ぼした者は昔しから今までに何の

位あるか知れん　猪「ナヽナールほど　骨「例へば泥坊が刀を出して手前を殺さふとしても泥坊は元々金が欲いからの泥坊で命を取た處が何の益にも立ないものだから金さへ出せば命は助かるけれども色と云ふ刀の先を差付られた日にやア手前も氣の附ない油斷から大金を振り蒔て腹の中をゑぐられ命を失なふ大疵は再び治する樂はない又た酒と云ふ槍先で臟腑を突破られた大疵は是も癒る樂はないソレ見ろ此樣な大きな怪我は何ともいはないで些細な泥坊を恐れて用心するたア實に大馬鹿の三太郎ぢやアないか又た其次には金を取られ衣服を剝がれるのを恐れるからの用心だと云ッたが是も頭を隠して尻を隠さない丸で

蚤を見たやうな大ベラボウだ何故なれば泥坊が丸裸体にしたからッて手前の身体が明日から潰れて仕舞と云ふ譯でもないが泥坊を怖がッて用心の爲だと伴て來た女郎や幇間こそ手前の金を取り衣服を剝とるばかりか家も藏も田畑も剝とる大泥坊とは知らないか　猪「なるほどナヽなるほど　骨「また其次には世間へ對して外聞が惡るいと云ッたが是もベラボウだ全体手前が世間へ對して外聞の惡い事を知ッて居りやア何して其の身持の放埒を止ないのだ身持の惡いほど世間へ對して外聞の惡い事は無いぢやないか其の放湯がだん〳〵と増長して見ろ縱ひ何万圓の身代でも造作なく棒に振て荷擔ぎ人足となる者もあればエン

サカホイと大八車を曳のもあり、或ひは乞食同様になる者もあれば或ひは欠落夜逃をする者もあり夫も自分だけの事なら未だしも宜が先祖や主親や親類友達の顔までも汚すのは此上もない世間の不外聞とは思はないか手前は自己を泥坊だと思ッて居るけれども手前こそ自己よりかズット上手を越た大泥坊だナゼ手前を大泥坊と云ふかといふに第一親の大恩を忘れて親の目を盗み先祖からの身代を盗みとる泥坊だから其の天罰が報つて來て又た手前が頼みにする奉公人が直に手前のする事を手本にして手前の目を盗み主人の物を盗み取やうになるのだ夫から其の剝取た奉公人の天罰は直に酒色のために剝取られて一生を過ま

るとは誠に可哀想なものぢやアないか　猪、如何様ねへ成ほど　骨、爾してこの奉公人に不義を教へて一生を誤らし泥坊仲間に引入れた親玉は何處に居るかと尋ねて見ると盗人をとらへて見れば我身なりだから苟旦にも油斷をしては成らない又た自己のやうな泥坊よりも油斷のならない不用心なものは手前へが用心のためとおもッて伴れて來た女郎や幇間だ其の不用心で當てにならないとおもつた女郎や幇間や其のほかのものよりは未だ一層不用心で當にならない者は手前が遣ッて居る奉公人だ其また不用心で當にならない奉公人よりも未だ不用心で當にならないものは手前だ馬鹿な根性ッ骨だから此の以後は能く氣を附

るが宜とサン〳〵に異見を食た上に着て居た着物も持て居た金も殘らず取られて仕舞たと云ふ話しがあるが如何樣それに違ひない己自は泥坊の肩を持譯ではないが其の理屈は尤もな事だとおもふヨ……然から女郎がお前さんに一日逢ないと病氣が出るのヤレお前さんと夫婦に成れ無いやうなら寧その事死んで仕舞た方が宜なぞヽ口の先では旨い事を云ふけれども失ぢやア一日逢なかつたから定めて病氣が出たらうと思ふとナニがさて病氣が出る處かピンシャンして冷飯の七八杯もペロリと遣て澄アし込で居るし又た夫婦に成れなかつたから首でも縊て死で仕舞かとおもふとドウして〳〵女郎だッて命は失張り一ッしか無

いから死よりは鼻唄でも謠ッて居る方が野ン氣で宜と澄アし込で居るのを見ても虚言と本當とは直に知れる……好んば又たお互ひに惚たとか脹たとか云ふ中で其の望み通り夫婦になつたにした處が迚も長くは續かない夫やア續かない筈だナぜなら其女が廓中に居た時には賣物に花で從ひ狎がハックションをしたやうな面でも白粉をコテ〳〵と塗て居るし黑狸から所得税を取に來さうな身体でも赤い物や紫の物や色〻な寄麗なものを着飾ッて居るから一寸田舍芝居のお輕位ゐには見へるしお負に酒を飲せろと云へば酒を飲せ團子が食度と云へば團子を持て來る寢度と云へば寢かせ起度と云へば起し頭を張倒しても怒りもせ

ず足で蹴飛しても笑ッて居ると云ふやうな塩梅だから之を自家へ伴て行て女房にしたら定めし貞女だらうと思ッて折角大金を出して伴て來て見ると何して前とは大違ひ顔の白粉がとれて見ると狎のハックションが丸出になり身体は赤や紫の飾りがとれて見ると黒狸が本性を顯はしお負に身体に怠情の癖がついて居るから朝は十時頃まで鼻から提燈を出して寢て居る女の爲へき針仕事と云ッたら糠袋一ッとして滿足には縫ぎ飯を炊せれば半分は粥になつて半分は米の儘で居るし洗濯をさせればメクラ縞の股引を班にして仕舞し夫を小言を云へば齒を剝出して食ひ附し張倒せば警察へ駈込むし夫で買食が好で錢遣ひが荒くてお

饒舌りで尻が輕くッて寢屁を垂て寢小便をすると來て居るのだから是でドウして尋常の家へ來て永く續くへき筈がない然から『手に取るな矢張り野に置け蓮華草』と云ふ戒めの句もあるのだ……どうだい夫でも失張り山の神より素屁多女郎の方が宜と思ふかね　猪夫やア偶にやア其様な娼郎もあるか知りませんけれど十人が十人殘らず爾とも極りませんやね娼郎は皆な薄情なもんだとすると情死する者なんざア無さゝうなものだが夫が女郎にや昔しから惚た情夫と情死する者アイクラもあるが女房と情死した者はまだ一人もありますまい……ソレ御覽ヒろ然だから女房よりか女郎の方に實がありまさアね　骨其様

な馬鹿を云ふから困る夫ぢやア今度は女房の効能を云ッて聞せやう

○女房の効能

骨「一軒の家を以て一ケ國に譬へて見ると先づ主人が總理大臣で女房は内務大臣と云ッたやうなものだ　猪「シテ見ると息子は書記官とでも云ふのですかね　骨「さう〳〵先づ爾云ッたやうなものだサウ物が理解て呉ると大層話しが日易い……ソコで總理大臣は内務の事も支配する權があるから内務大臣は素より總理大臣の命令に從はなければ成らないけれども同し從ッて居るにしても内務大臣は内務大臣だけの

權式と云ふものもあるし又た内務大臣になつて居る人は内を治めるのに上手な人がなつて居るのだから自己の職掌の事に就て是非これを斯仕なければ成らないと思ふ時に總理大臣が夫は駄目だ其樣な事をしては行ない是非自己の云ふ通りにしろと云ッても現在國を治める爲に惡いやうなら其處は飽までも云ひ張て自分の思ふ通りに仕なければ成らないが若し其時に總理大臣が引出し違ひをして是は怪からん自己が總理大臣で居て夫は行ないと云ふのに强て自分の了簡通りに仕やうと云ふのは丸で自己を踏附にするのだ此樣な奴を内務大臣にして置と仕舞には何樣な事を仕出糟かも知れないから此樣な奴はペケにして仕舞て

何でも自己の云ふ通りへイ〳〵ハイ〳〵と云ッて能く命令を聞奴に仕やうと其事の善惡に拘はらず前の大臣をペケにして新規に自分の氣に入た何でもへイ〳〵ハイ〳〵と云ッて天窓を下て居るやうな者を內務大臣にした日には一ケ國の政治は丸ッきり滅茶〳〵になつて仕舞う……是と丁度同し事で一家の主人は一家の事を支配して寢かさうと起さうと金を溜やうと打潰さうと主人の了簡一ッでどうでも成るのだが併し主人となつて一軒の家を治める以上は寢かしたよりは起した方が宜し打潰したよりは金を溜た方が宜から爾する日になつて見るとイクラ主人だからと云ッても千手觀音の變化でもなし七面菩薩の生れ替り

でも無いから飯も炊たり洗濯も仕たり着物も縫たり商賣も仕たり何から何まで一人で遣て除ると云ふ譯には迚も行ないからソコで女房と云ふものが有て主人の不得意な飯炊や惣菜の取計らひや又は着物の裁縫洗濯などをして主人を補佐て行から夫で先一軒の家がまるく治まつて行のだから女房は素より亭主の下役とは云ひながら女房は女房だけの又た權式と云ふものも無ければ成らん……權式と云ッた處が無暗に威張て亭主を臀の下へ敷やうでも困るけれども例へば亭主が朝から酒を飲でグヅ〳〵して居るとか又は着る物まで質に置て素屁多女郎にはまり込とか其外何事にまれ自家の不爲だと思ふ事があつた時には能く

其理由を云ッて飽までも止なければ成らん其の不爲だと思ッて止るのを亭主の方で見當違ひをして此の阿魔め生意氣な事を云つて自己の仕やうと思ふ事を邪魔をする元々自己の身上だもの寢かさうと起さうと大きにお世話で蕎麥屋の湯桶ぢやアあるめへし横素ッ方から口を出すにやア當らねへ此樣な奴を女房にして居ると五月蠅ッて仕方がないから寧その事此奴はペケにして仕舞て自己の氣に入た何でもハイ〳〵ハイ〳〵と云つて能く言事を聞く奴に仕樣と云ふやうな事では縱ひ何樣な身代であらうとも忽ち滅茶〳〵だ　猪「イヤに女房の肩を持ぢやアありませんか　骨「ナニ別に女房の肩を持と云ふ譯では無いが一寸早

い話しがマア其樣なものだ尤も女房も女房によりけりで中には亭主が汗水を垂して稼いで居るのに何處を風が吹かと云ふやうな顏をして居たり或ひは亭主が汗臭い着物を着て居ても澄アし込で居たり或ひは身上にも搆はず旨い物を食たがつたり好衣裳を着たがつたり或ひは芝居道樂寄席狂人などは是は論外だけれどもお前の女房どんなんぞは別段是と云ふ道樂のあるでもなしお前が爾して毎日〳〵ブラ〳〵して遊んで居ても自家では眞ッ黑になつて着たい物も着ず食度ものも食ずに一生懸命に人仕事を仕たり洗濯物を仕たりして働らいて居るのだから自己なんぞの眼から見ると餘ぽど貞女だとおもつて居るよ　猪「人樣の

眼から見たら貞女と見へるか何と見へるか知ませんけれど自己の女房ほど意愚地のねへ凡突な者は凡そこの世の中にやアありまんよお負に意愚智のねへ癖におしやべりで焼き餅やきで吝嗇地で負け惜しみがつよくつて強情で理も非も分らねへと來テーるのだから本當に始末におへねへンです……今朝だつて爾でさア自己が家へ歸ると行なり人に劔突を食はせやアがつて其云ひやうが氣に食ねへぢやアありませんが……オイお前さんは何處をノソ〳〵とノタクツて居るンだい人に南京米なんど食して置やアがツて私窩子買も極樂買もねへもんだ馬鹿々々しい……昨夜差配人から怒つて來たよ此の十日までに拂は無きや

ア知退て呉つて來たよ其樣なにノソ〳〵歩附あるいてる場合ぢやアないぢや無いかお負に米もモウないよ薪もないよ醤油もないよ何にも無いから自家の者ア日干になつて仕舞うぢやアないかチト人間らしく活潑おしなねへ本番にお前さん見たやうな木偶の坊は唐にも天竺にもありやア仕ないと……云つたやうな事を隣り近所へ聞へよがしに吐鳴んですからイクラ自己が默止ていやうと思つても男の意地でツイ默止ちやアいられねへぢやアありませんか……全体何處をノソ〳〵とノタクつてるテー云草がありませうか人を蚯蚓か何かの樣に思つて居やアがるんですよ……成ほど店賃を拂はねへのは自己が惡いサ米も薪

も買て遣ねへなア是も自己が悪いサ自己がわるいにやア違へねへけれど米が無けりやアお前さん米がモウ無いよ薪が無けりやアお前さん薪がモウ無いよト細さな聲でいッても事ア足るぢやありませんか夫れを世間へ聞へよがしに店立の事から味噌醤油の無へ事まで吐鳴ちらしてお負に自分の亭主の事を木偶の坊だの東變木だのと云つて夫で貞女と云はれませうか　骨「其様なに自己に理屈を云ッたッて仕方が無いぢやないか　猪「ナニ理屈と云ふ譯ぢやアありませんけれども自己の愚妻を貞女だと仰しやるから自己がマア一通りお話しをするのです……然が其處へ行ちやア隣りの熊公の愚妻なんざア感心の跨潛りですせ

熊公の留主の時にやア彼のピーく泣く赤ン坊を脊中に脊負て守を仕ながら洗濯も仕たり飲も炊たりして一生懸命に働いて居るし夕方になつて熊公が仕事から歸る時分にやアチャーンと膳の上へ一合つけてサア召あがれと云はねへ計りにして待てるし熊公は彼様な氣の短けへ男だから偶にやア吐鳴つける事もあるけれどイクラ吐鳴つけられても別段口返答をするでもなし熊公が何程ノラクラして遊んで居ても何ともいはず偶にやア女郎買にも行く様子だが夫でも燒餅も燒ず本當に好女房ですせ然から自己も何かして彼様な女房と乘替度と思ッてるんです骨「イヤ熊公の女房が何れほど立派な女だか何様なに利口な女だか知

らねいが夫は譬へにも云ふ自家の鮓より隣家の麥飯で女房に拘はらす人の物だと思ふと何でも自分の物より宜く見へるものだ夫に熊公の女房も利口だか知らないが第一熊公が利口なのだ例へば一寸物を縫のにでも針が曲ッて行と糸も矢張り曲ッて行から其縫た物が誠に不様で見ッともないが針が眞直に行と糸も眞直に附て行から縫た物が奇麗に出來るのと同じ事で熊公がセつセと稼ぐから女房も負ない氣になつて稼ぐ熊公が女房に心切にするから女房も熊公に心切にすると云ふやうな譯だから其樣なに能く治まッて行のだ夫がお前のは熊公と違ッておれはブラ〳〵遊んで居ても手前はセッセと稼げ自已は旨い物を食て居る

けれども手前は餓へ死でも宜と云ふやうな調子だから何樣な者だッて夫で默止て居やう筈がない夫を自分の事は棚の上に上て置て只女房が氣に食ないの叩き出して仕舞うのと云ふのはお前の方が大變に無理だ夫やアお前の女房をお前が叩き出すのだからお前の勝手次第で自已やア些とも痛くも痒くもないけれども何にしろお前のやうな了簡ぢやアなまじひ常盤御前や袈裟御前のやうな女房を待ても駄目の皮だ夫れに世間の人は能く女房と疊は度々替る方が宜と云ふことを云ふが是れは大變に間違ッた事だナゼなら女房の無い獨身の者は何樣なに正直でも世間の人の信用と云ふものが薄いし又た女房を持た者でも昨日婚禮をした

かと思ふと今日はモウ離縁した今日又たお代りが來たが明日は又候獨身になつたと云ふやうでは縱ひ何樣な理由があるにしろ世間の人は其理由を知らないから先づ其當人がアヤフヤの人間だと思ッて是も信用が薄い……然から正直な人が女房を持て身を堅めれば是は又た格別だが縱ひ正直と云ふまでゝ無くとも女房を持て身が堅まりさへすれば世間の人が先づ安心して信用するやうになるから是か第一女房の効能だ　猪「信用だか軍用だか知らないけれども其樣な事ア何だッて宜ちやアありませんか手前で働いて手前で食てせへ居りやア　骨「イヤ手前で働いて手前で食て行やア夫で差支へはないやうだが併し其手前で

働いて手前で食て行のにも矢張り世間の人の信用と云ふものが無ければ食て行ないテ　猪「へー信用テーものア妙なもんですねへ……全体信用テーものア何樣なもんですねへ　骨「何だか知らないで相手になつて居るとは驚いたね……夫ぢやア是から信用と云ふ事に就て話しを仕やうか……ソコで一寸茶を一杯

○信用は身立の基

骨「信用と云ふのは一寸マア早い話しがお前が近所の酒屋へ行てオイ一寸これへ酒一升と云ふとヘイ畏まりましたと德利へ酒を入るソコで

お前が勘定は一所ですよと云ふと酒屋の番頭がイエ何時でもお序で宜しふ御座いますと云ふだらう　猪「處が中々どうして彼のランプ親父が爾手輕な事に行もんですかッイ二三日跡にも只た二合の酒を何しても貨やアがらないでお負に去年の些とばかしの殘り勘定でせへ能く覺へて居て催促する位ですもの何して何時でもお序で宜しいなんて云ふもんですか　骨「ソレ其處だで夫が自己の云ふ信用と不信用の違ひで其の去年の殘り勘定まで催促を受るのがお前の身に信用がないので自己の今云ッたやうにイエ何時でもお序で宜しいと云ふのがお前に先方で信用して居ると云ふものだソコで此の信用を受るのと不信用になる

のとは何が本だと云へば正直と不正直が本で正直な人は別段催促を仕なくッても拂ふべき勘定はサッサと拂うし不正直な人は催促をしても拂はないから先方では此人は正直な人だなと思ふと信用するし此人はズルイなと思ふと何樣なに口の先で旨い事を云ッても信用して呉ないと云ッたやうなものだ　猪「なるほどシテ見ると何でも正直にしてドッサリ借込で借込で仕舞てから跡で拂はねへと……　骨「跡で拂はなけりやア矢張り不正直なのだ　猪「此奴ア大しくぢり　骨「然からば何樣な火の車の苦しい思ひをして居ても何時か自然と樂になると云諺にも正直の頭に神宿ると云つて人間は何事も正直にさへして居れ

ふが成ほど夫に違ひないテ早い話しが此の道人だ道人の生れた時には丸の眞裸体で生れたのだが人間が正直なお蔭には此方で默止て居ても腹の減たときには宜塩梅に乳汁を飲して呉るし寒い時には別段催促も何にも仕なくつても暖かに衣服を着せて呉るし夫から成長なつても働きさへすれば金も出來又た此方から金さへ持へ行ば何なりと慾い品が自分の物になる尤もドウかすると朝粥晝ヌキ晩雜炊と云ふやうな手數の掛ッた食物を食ふ事もあるけれども　マア〳〵何か斯か骨と皮ながらも命を繋いで居るのは全たく正直にして人の信用を受て居るお蔭だ

猪「オット少し寶丹でも呑ないと何だか變になつて來ましたゾ　骨「

是でもお氣は慥なんだから可笑い……イヤ常談は扨置て何に致せ人間の正直と不正直とは大した違ひなもので又た身に取て損得のあるのも大變な違ひだ……例へば道人のやうな佛樣を見たやうな　猪「なるほど幽靈見たやうな顏をして居ますからねへ　骨「其樣なに人を茶にしちや困るよ……マア佛樣を見たやうな極々正直で信用のある人間が……　猪「さうですねへ損料の品を借て直に七ッ屋へ打込なんざア本當に正直ですからねへ　骨「マア其樣な人聞の惡い事を云はないで默止て聞が宜ぢやないか　猪「夫ぢやアマア默止て聞ませうよ……へーなるほど夫から何したんです　骨「極々正直な人間が他所へ

金を借に行てエヽ誠に早や毎度ヤし兼ましたがお手許に一寸百圓ばかり有ますなら今月の末までホンノ暫時の間ですが拜借は願はれますまいかと云ふと先方ぢやア此人なら何程貸ても大丈夫だと思ふから夫は何よりお易い御用です幸ひ此處に二三百圓遊んで居るのがありますからお入用だけお持成さい……夫ぢやアどうか百圓だけ……ヘエ百圓で御用が足りますか何ならモウ五十圓も……ナニ百圓ありやア澤山ですが証書は何云ふ風にナーニ……其樣な他人行儀なお前さんに預けて置やアドル函へ入て置のも同し事ですからマア其樣な堅い事を云はずに是だけ持て行てお遣ひ成さいとポーンと二百圓ぐらゐ無抵當

で貸て呉る　猪「どうも近頃は法螺の吹方がベラホウ上手になりましたねへ　骨「ナニ螺ぢやないさ……是と違ッてお前の樣な不正直な泥坊の上前取見たやうな男が頭を搔たり疊の塵を毟ッたりしてタッタ二圓か三圓の端た錢を借に行てもヤレ抵當は何だの保証人は誰だの返濟期限は何時だのと夫は〳〵どうも滅法界に手數が掛ッて身動きの出來ない事と云ッたら丸で鵜桶へ足を突こんだ樣でドウにも斯にも始末におへない併し夫で貸て呉れば宜が酢だの蒟蒻だのと云ッた末エヽ面倒臭い此樣な奴に金を貸た日にやア何せ仕舞には裁判所ものだからマ〳〵障らぬ神に祟りなしだ胸の中に錠をおろされて其人は現在其處

にペラを杭にして公債証書の中に居眠りをして居りながらイヤ折角のお頼みゆゑ何か都合して上たいものですが何分にも御存じの通り此の不印で御覽の通り代物は斯して寢て居るし懸先は取れず實は自家でも何か仕なけりやア成るまいと思ッて居る矢先ですから誠にお氣の毒ですがとアベコベに泣言を並べて旨く斷られるが先づ世間並の事だがナント正直と不正直とは大層な違ひのものでは無いか　猪「金借ぢやアー平生に失敗つけて居ると見へて中々調子合が旨へもんですね　骨「ナニ自己やア失敗た事はないがマア〳〵此樣なものだらうと思ふのだ……然から商人にしろ職人にしろ第一世間の人の信用と云ふものを受

なければ行ん例へば何屋の品は曖昧物がない彼れが本當の商人だ誰某の細工は誠とに丁寧で宜い彼れが本當の職人だと云ふやうに評判を取と少し位直段は高くても人が安心をして買て行き又た細工物なら遠方から態々頼みに來ると云ふ塩梅だから繁昌の上に益〳〵繁昌し金のある上へ益〳〵金が出來るやうなトン〳〵拍子に行が是が若しアベコベになつて世間の信用がないと來た日には丸で形無のものでイクラ鬼灯提燈を點て賣出しをしても皆無お客が來ないから貧乏の上に益〳〵貧乏になる殊に又たお醫者などは尤も信用が肝心なもので前に云ッた商人などは若し店で代物が賣れ無ければ大道店を張ても賣と云ふ事があ

るけれどもお醫者さんばかりは爾は行ないイクラ病人がなくても眞逆に病人は有ませんか藥は入りませんかと下駄の齒入や蝙蝠傘繕ひ直しのやうに大道を吐鳴て走行はけには行ないから信用のない流行ないお醫者さんほど始末におへない者は無からうと思ふヨ　猪「本當に爾ですねへ自己の近所に數井竹庵テー醫者がありますがね此奴が又たどう云ふもんだか些とも流行ねへ醫者で病人なんテーものア何年にも見た事がねへですから此節は自分でも斷念たと見へて家の賣買だの權妻の周旋なんぞをして其手數料で何か斯か飯を食てるテ云事ですが醫者の看板を掛て居て權妻の桂庵とは隨分氣の利ねへ隊長ですねへ　骨「世

間の信用がないと先づ其樣なものだ夫が信用があつて流行となると醫者ほど又た宜ものはない一寸手を握ると夫で診察料が何程と云つて取れるし又た鼻糞をまるめて遣つても藥九層倍の金になるしお負に信用のない醫者だと何うしても死べき病人が死でも其醫者が殺したやうに云ふが用用のある醫者だと未だ命數のあるのをツイ盛殺しても盛殺された方では格別氣にも留ず彼の先生に診察もらッて死だのだからモウよく〳〵命數がないのだと絶念て居るやうなもので信用せられるのと不信用なのとは大層な違ひなものだ然からお前もノラクラ遊びはモウ宜加減にして些たア世間で信用しられる樣にならないとお前は夫でも

濟か知らないが第一子供が可愛さうだ　猪「ナゼ子供が可愛さうなんです自己だッて矢張り人間並に餓鬼やア可愛もんですからチャーンと三度の飯を食してお負に學校へまで遣て有りまさアね　骨「なるほど學校へ通學させるのは感心だ是は奇特の至りと譽て遣はす……夫は譽て遣はすが併しお前が信用がないと其子供まで信用が薄くッて何せ彼の男の子だもの滿足な人になれる者かと云ふ……如何樣これも一理ある事で親が宜ければ平生の敎へも善から其子も良なる親が惡ければ平生の敎へが惡いから其子も惡くなる道理だ　猪「何だか今日は無暗に自己を惡く云ひますねへ　骨「ナニ別にお前を惡く云ふ譯ぢやア

ないがお前が餘まり野ン氣過るから物の道理を云ッて聞せるのサ　猪「夫ぢやアマア仕方がねへ聞のも放樂だから大道講釋でも聞く氣でモウ少し聞ませうヨ……夫ぢやア子供を敎へるにやアどうしたら宜ンでせう　骨「爾聞かれて見りやア道人も駄止ても居られないからモウ少し饒舌らうか……扨て子供の時と云ふものは水の方圓に從ふが如しと云ッて水を桶の中へ入れば圓い形に成り箱の中へ入れば方な形になると同じ事で親の敎へやう一ッで善くなり惡くもなるものだ尤も燒野の雉子夜の鶴子をおもはない者はない縱ひ自分は乞食を仕て居ても其子には乞食をさせ度ないどうかして人間並の事がさせ度と思ふに違ひ

ない……けれども親が乞食をして居ると矢張り其子が親を見習ッて乞食になる是が世に云ふ蛙の兒は蛙になるのだ　猪「イヤ其蛙の事で思ひ出しましたがねへ此間も彼の餓鬼めが餘まり惡戯を仕やアがつて自己の云ふ事を聞かねへから自己が此野郎手前は自己の云ふ事を些とも聞ねへか聞なきや聞ねへで宜今に眼の子玉が脊中へ附から爾おもッて居ろ彼の蛙だの鰈なんざア皆な親の云ふ事を聞ねへから眼の子玉が脊中へ附たんだアと云ふと奴子の云ひやうが宜ぢやアありませんか……爺や馬鹿な事を云ひねへ蛙や鰈の眼の子玉が脊中に附てるなア彼やア生れ附だアね爺の云ふやうに親の云ふ事を聞ねへで眼が脊中へ附

くんなら親の眼の玉は前に附て子の眼の玉ばかし後に附て居さうな者だけれど親でも子でも皆な同じ事だから彼やア生れ附だアねと斯云やアがるんです未當に今時の餓鬼やア生意氣な理屈を云やアがるぢやアありませんか　冒ナニ生意氣な理屈ぢやない今の子供は皆な中々利口だから其の位な事は誰でも知つて居る元來日本の風として子供を敎るのに親が虛言を吐が是は甚だ善ない事だ例へば飯を食て直に寢ると牛になるだの眞暗な處へ燈なしで行とお化が出るだの或ひは云ふ事を聞ないと巡査さんに縛られるだのと云つて嚇すから子供は正直に失を本當だと思つて親の云ふ通りにするのは宜が其お化が出るだの巡査さ

んに縛られるだのと云ふのが腹に染渡ッて成長た後にも大變な臆病者になる　猪「なるほど此奴アさうかも知れませんねへ夫に就て斯云ふ事がありましたよ此春でしたッけ友達と向ふ島へ花見に行たとき四歳か五歳になる子供が迷子になつてメソ〳〵泣てるから自已も可愛さうだと思ッて色々聞て見たけれども只泣てるばかりで何しても分らねへから巡査に頼んで歸らうと思ふと其子が一生懸命になつて巡査さんは怖いヨー巡査さんは縛るから嫌だヨーッて逃廻るんで本當に手固摺た事がありましたッけ是なんぞが矢張り平生に威かしたんでせうねへ骨「大方さうだらう夫だから困るのだ……尤も家庭教育と云ッて小

兒の中に親が教るのと云ふものは何にしろ相手が小兒で理も非も分らないのだから中々六ケ敷ものだけれども何にしても成たけ譯の分るやうに云ッて聞せて餘まり威かしたり虚言を吐ないやうにするが宜又た人によると子供は嚴しく育て無れば行んと云つて無暗に打たり敵いたりする人があるけれども餘まり嚴しくすると了簡がイヂケて仕舞て却つて役に立ないものが出來るから餘まり嚴しくするのも善惡だしト云つて餘まり云ひ成り放題にして置と段々成長なるに從つて我慢になつて何を云つても云ふ事を聞ないやうになるから其處は臨機應變で旨く遣無ければ成らない夫から其子が學校へでも行やうになると又た親の

教方も違つて來るけれども餘り長くなるから先づ此邊で一服と仕やう

滑稽自慢

大博士絵

明治卅七年七月十九日印刷
明治卅七年七月廿九日發行

編輯兼發行者　東京市淺草區下平右衛門町九番地　岡村庄兵衛
發行者　東京市淺草區福井町一丁目一番地　池村鶴吉
印刷者　東京市神田區南乘物町十五番地　龍雲堂大塲沃美
發行所　東京市淺草區下平右衛門町九番地　盛花堂
發行所　東京市淺草區福井町一丁目一番地　松陽堂

不許複製